

久邇宮三代の書について

内 田 誠 一

久邇宮は、朝彦親王あさひが明治八年（一八七五）に創始された宮家である。第一世・朝彦親王、第二世・邦彦王くによし、第三世・朝融王あさあきら、いづれも能書の誉れが高い。小稿では、歴代の水茎の蹟を拝しながら、その書について些かご紹介をしたい。なお、敬称・敬語は史家の作法に則り、最少限度にとどめるようつとめた。

一、第一世・朝彦親王とその書

朝彦親王（一八二四—一九二）は伏見宮邦家親王（一八〇二—七二）の第四王子。富宮と号す。幼名熊千代。所生は鳥居小路信子。号に東里・桃李などあり。

天保七年（一八三六）八月、仁孝天皇の養子となり、一条院主に補せられる。翌年八月、親王宣下により名を成憲と賜り、興福寺別当に補せられる。興福寺に、仁孝天皇宸翰「成憲」の御名書あり。同九年閏四月、得度、法諱尊応。嘉永元年（一八四八）二月、二品に叙せられる。同五年正月、一乗院を出て、青蓮院に移り、法諱を尊融と賜う。同年十二月、天台座主に補せられる。安政六年（一八五九）九月、安政の大獄により、座主の任を辞して青蓮院を去る。

同十二月、謹慎永蟄居を命ぜられ、相国寺中の桂芳軒に移られる。

文久二年（一八六二）四月、永蟄居を免ぜられ、同五月青蓮院門跡に還住。同年十二月、国事御用掛を兼ね、翌年正月、還俗して中川宮の称号を賜う。同年八月、元服の礼を行い、弾正尹に任じ、朝彦の名を賜う。元治元年（一八六四）十月、中川宮の号を賀陽宮と改める。明治元年（一八六八）、八月、陰謀事件に連座。勅使・徳大寺実則まねつねら来邸し、親王を安芸（広島）に去らしめ、広島藩に幽閉。同三年閏十月、復帰を許されて京都に謹慎。同五年正月、宮号を復し三品に叙せられる。同八年五月、仁孝天皇の養子に復し、久邇宮と称す。同年七月、神宮祭主に任ぜられる。同二十四年十月薨去。

なお、伊勢市にある皇學館大学は、明治十五年四月、神宮祭主であった朝彦親王の令達により神宮学問所である林崎文庫に開設された神宮皇學館がその前身である。

親王は能筆であり、多くの染筆が残されているが、石碑に刻されたものもある。北野神社境内に元来建てられていて、のちに教王護国寺灌頂堂の南に移された「仏頂尊勝陀羅尼碑」（嘉永六年）。そして平等院正門前にある「宇治製茶記念碑」（明治二十一年）がそれである。

さてここで、朝彦親王の肉筆御草稿についてご紹介したい。真田紐で結ばれた桐箱（縦四七・九×横二七・八×高一三・二糎）の中に二十点が一括して保存されていた。中には誰某から懇望されて何年の何月に下付されたということが包み紙に記されているものもあった。なお、桐箱の中には、第二王子である邦憲王の肉筆の書も三点入れられていた。この御草稿は親王の執事をしていた人の家に伝来したものとされている。以下、その朝彦親王の書二十点と邦憲王の書三点の詳細について記す。なお、斜線（/）は改行を示す。

朝彦親王御草稿

1 青柳高軻^{みかとも}へ御下賜の書の御草稿四種（明治十六年）

「神之億府／国之靈鎮／二品朝彦親王」

紙本 縦三〇・八×横二六・五糎

紙本 縦三一・八×横三〇・一糎

紙本 縦三三・二×横三〇・五糎

紙本 縦三三・七×横三〇・二糎

※包紙（縦三七・四×横五〇・三糎）に「明治十六年十二月十日御下渡之御／下書 青柳高軻ヨリ願也」の墨書あり。青柳

高軻（一八四〇—一九二）は下総生まれの国学者。足利氏木像景

首事件に加わり、伊勢菰野藩に幽閉。鹿島神宮少宮司。

2 岩下方平^{みちひら}へ御下賜の小扁額の御草稿（明治十九年）

「年豊人衆／東里」 紙本 縦一八・三×横八四・〇糎

※包紙（縦二四・三×横三三・六糎）に「十九年四月廿四日岩

下／方平へ御染筆被下御草稿」と墨書あり。岩下方平（一八二

七—一九〇〇）は薩摩出身の政治家。子爵。

3 西岡幸之助へ御下賜の三社神号の御草稿（明治二十年）

中央に「天照皇大神」その右に「八幡宮」左に「春日大神」（無款）紙本 縦一〇七・一×横五三・四糎

※包紙（縦四九・六×横二八・一糎）に「明治廿年吉田嘿取次／願人佐賀県下肥前松浦郡大黒里／村 西岡幸之助／御下付濟」と墨書あり。なお「大黒里村」の「黒」の字は「里」の字を誤って書いたと思われ、「黒」の字の上に重ねて圈点が付されている。「大里村」が正しいのであろう。なお取次役の吉田嘿（一八五八—一八九八）は曇華院宮家士で勤皇家。白峰・龍田・大和神社宮司を歴任した。

4 石丸忠胤^{ちゆ}へ御下賜の書の御草稿（明治二十一年）

「神籬／者官／底之／元始／明治廿一年五月／朝彦（竹園）

〈常兄〉（朱文印）」 紙本 縦二七・〇×横三八・〇の半紙二つ

折り。（図1＝署名部分）

※半紙二折り三枚を紙縫で綴じてある。第二丁の端に「廿一年

六月四日御下付

願主 石丸忠胤

と朱書あり。石丸

忠胤（一八四〇—

没年不詳）は伊予

の人。近江多賀神

社・貴船神社宮司

を歴任した。

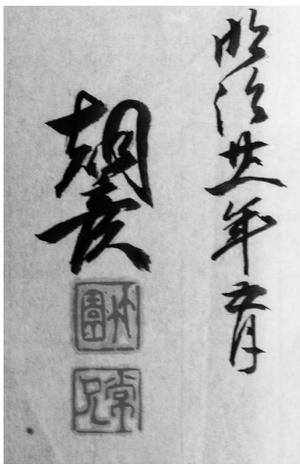
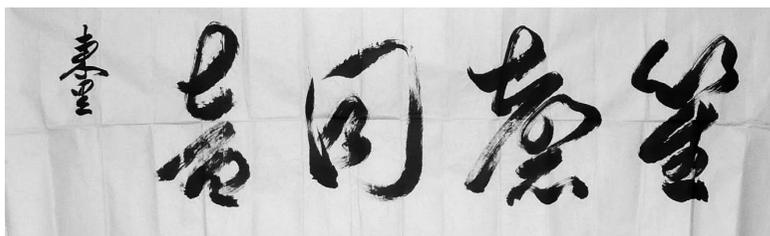


図1

図2



5 小品御草稿(明治二十三年)

「遺芳 明治廿三年五月 東里」 紙本

縦二七・七×横三九・五 糶

6 北条的門へ御下賜の扁額の御草稿二種

「笙磬同音/東里」 紙本 縦六〇・一

×横一八五・四 糶(図2)

※裏に「大雲院前住職北条的門へ被下」と墨書あり。北条的門は富山の人。京都大雲院住職。著に『的門上人全集』五巻がある。

「笙磬同音/東里」 紙本 縦六〇・五

×横一八四・一 糶

※包紙(三九×五二・五 糶)が添えられ、そこには「宮御方御題字北条的門へ被下」と墨書あり。但し、この包紙が、この扁額御草稿二種に付属していたか否かは定かでない。

7 神号御草稿

神本 縦一四四・三×横三七・二 糶

「天照皇大神」(無款)
※雲紙三枚継ぎ。

8 天壤無窮の神勅一行書御草稿

「宝祚之隆当与天壤無窮者矣」(無款) 紙本 縦一三八・六×

横六五・二 糶

9 扁額御草稿

「綜芸種智院」(無款) 紙本 縦四二・八×一三九・五 糶

いづれへ御下賜されたものか不明であるが、「綜芸種智院」とあるので、真言宗の雲照律師(一八二七—一九〇九)が明治十四年に開設した総贖(僧侶育成機関)のために染筆されたものであるうか。

10 扁額御草稿

「聖徳殿」(無款) 紙本 縦七五・八×横二二〇・五 糶

※いづれに御下賜されたものか不明であるが、「聖徳殿」とあるので、いづれかの寺院の聖徳殿のために染筆されたものであるうか。

11 扁額御草稿

「美意延年/東里(朝)(朱文印)」 紙本 縦三二・〇×横一

二八・五 糶

12 扁額御草稿

「中心蔵之/東里」 紙本 縦三六・四×横一四九・一 糶

13 小品御草稿二種

「淡静/桃里」 絹本 縦三五・八×三八・三 糶

「淡静/桃里」 紙本 縦三六・〇×横三八・一 糶

14 小品御草稿二種

「戩穀/東里」 紙本 縦二二・三×横三五・一 糶

「戩穀/東里」 紙本 縦二一・八×横三〇・〇 糶

※「戩穀」とは善を尽くすこと。

邦憲王御草稿

15 一行書御草稿二種

「神理以獎俗／邦憲王」 紙本 縦一三七・〇×横四五・一糎

「神理以獎俗／邦憲王」 紙本 縦一三五・二×横四五・五糎

16 扁額御草稿

「稽古照今／邦憲」 紙本 縦四七・三×横一三六・三糎

二、二世・邦彦王とその書

邦彦王（一八七三—一九二九）は、朝彦親王の第三王子。母は女房・泉亭萬龜子。幼名は世志磨。雅号は恭堂、後年に至って謙堂・兼堂の号を用い、画や俳句では桃林の号を用いられた。また、別号に對月樓主人がある。「桃林」の号は、父宮の号「桃里」を意識されたものであろう。

王は幼少より経書や画を学ばれ、長じて雅楽・馬術・蹴鞠を学ばれた。明治十九年（一八八六）七月、元服し邦彦と改名。翌年三月、勅許を得て久邇宮の継嗣に治定。朝彦親王の第一王子の早世、第二王子・邦憲王（一八六七—一九〇九）病弱のためである。

京都府尋常中学・京都平安義塾・学習院を経て、明治二十六年十月、東京の成城学校卒業。明治二十九年五月、陸軍士官学校卒業。同三十七年、日露戦争出征。同三十五年十一月、陸軍大学校卒業。翌年十一月、大勲位菊花大授章を賜う。同三十九年十二月、功四級金鷄勲章並びに年金五百円を賜う。明治四十年四月、欧州見学に差遣、ドイツ・スペイン・オーストリア・イギリス・アメリカなどを

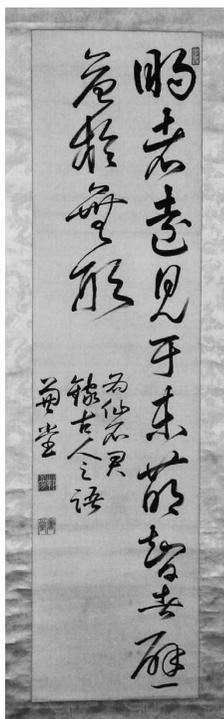
歴訪し、十月帰朝される。明治四十三年十二月、陸軍歩兵大佐に任ぜられ、歩兵第三十八連隊長に補せられる。大正二年（一九一三）七月、陸軍少将に任じ、近衛歩兵第一旅団長に補せられる。以後、第十五師団長・近衛師団長・軍事参議官を歴任。大正十二年八月、陸軍大将。昭和四年（一九二九）一月、薨去。その危篤に際しては、天皇より元帥の称号及び大勲位菊花章頸飾を賜うとのご沙汰あり。王は趣味広く、書道・日本画・洋画・漢詩・俳句を能くせられ、刀剣やビリヤード・テニスも好まれた。日本書道振會総裁として書道の奨励に努力される一方、画家とも交流があり、横山大観・山元春拳などに染筆を下賜されている。また中国の著名書画家・王一亭（一八六七—一九三八）に染筆を賜うとの約束をされたが果さず、倪子妃が邦彦王の真蹟を寄せて遺志に酬いられたという逸話が残されている。

王が染筆された額には、住吉神社の神額「住吉神社」（明治三十六年）、熊本・本妙寺の山門（仁王門）の額「発星山」（大正九年）、大阪府太子町の叡福寺の額「聖靈殿」（大正十一年）などがある。住吉神社の神額は謹厳な楷書で染筆されているが、本妙寺の山額は、寺が加藤清正を祀っているのを意識されてか、豪放な行書で染筆されている。また叡福寺の額は流麗な行書であり、王の書風は変幻自在な巧みさを備えておられる。横浜の総持寺には「大般若波羅密多經」（大正十二年）を写経されて奉納。千葉県君津市の神野寺の山門の額「鹿野山」（大正中期）や三重亀山駅前前の鳥居に掲げられた能褒野神社の神額（大正十五年）も王の染筆に拠るものと云う。また高田市には「昭和丁卯三月／忠魂碑／邦彦書」（昭和二年）とある忠魂

碑があったが、現存するか否か不明である。

掲出の軸(図3)は、妹宮・素子女王(一八七六一一九一八)の夫君である仙石政敬子爵(一八七二—一九三五)に下賜されたもの。表具寸法は縦二一四・〇×横四八・〇糎、本紙寸法は縦一四二・二×横三五・六糎である。「君子有縁」(冠冒白文印) 明者遠見于未萌智者避/危於無形 為仙石君/録古人之語/兼堂(邦彦)(白文印)(兼堂)(朱文印)とある。出典は司馬相如の「諫獵疏」である。

図3



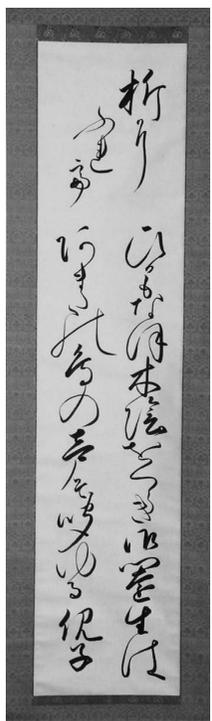
表具には、龍の柄の裂が使用されている。桐箱(縦五十六・六×横八・八×高八・〇糎)に納められており、蓋表には「邦彦王殿下御筆」と墨書された貼紙と「軸七十一」と墨書された貼紙が貼られている。また口貼に「久邇宮/御筆/180」、反対側に「邦彦王/二行/□三/一八〇」(□は難読)とそれぞれ墨書された紙片が貼られている。箱の中には「邦彦王殿下御親書解文」と墨書された封筒(縦二十四×横八・九糎)が付属しており、その中に邦彦王の肉筆で「仙石政敬の分/明者遠見于未萌。智者避危/於無形。」(訓点は省略した)とある変形の紙片(縦十七・六×横(最長)十六・一糎)が入っている。また別人の筆になる「明者」云々とある紙片が入っ

ているが、返り点が多く誤っている。「仙石政敬の分」(傍点内田)とあることから、王は、同時に他の人物に下賜する書も染筆されたことがわかる。

王の妃である倪子妃(一八七九—一九五六)は、旧薩摩藩第十二代藩主・島津忠義公爵(一八四〇—一八九七)の第八女。号は瑞園。邦彦王第一王女の良子女王は昭和天皇皇后となった(香淳皇后)。なお、香淳皇后の号「桃苑」は、祖父宮の号「桃里」・父宮の号「桃林」を意識されたものであろう。

掲出の倪子妃軸(図4)は、自詠和歌を書かれたもの。「折に/ふれて ひるもなほ木陰をくらき御園生は/あまたの鳥の声ぞ聞ゆる 倪子」とある。表具寸法は縦二〇四・〇×横四四・九糎、本紙寸法が縦一三九・〇×横三一・三糎。軸端には蒔絵が施されている。

図4



箱書は久邇宮別当であった宇川済(海軍中将・一八七九—一九七七)による。なお宇川が久邇宮別当となったのは昭和十年(一九三五)のことであるから、これは昭和十年代の箱書ということになる。箱は縦五二・二×横七・七×高七・二糎で、蓋表に「久邇宮大妃倪子殿下御染筆」、蓋裏に「奉 別当宇川済謹証(花押)」とそ

れぞれ墨書されている。

三、三世・朝融王とその書

朝融王（一九〇一―一九五九）は、邦彦王第一王子。妃は伏見宮博恭王（一八七五―一九四六）の第三王女・知子女王（一九〇七―一九四七）。明治三十四年（一九〇一）二月誕生。大正十年（一九二一）、江田島の海軍兵学校卒業。昭和四年（一九二九）、父宮の薨去にともない久邇宮を継承。同七年五月、大勲位菊花大授章を賜う。同十五年功四級金鷄勲章を賜う。同年七月、八雲艦長。以後、木更津海軍航空隊司令官・高雄海軍航空隊司令・第十九、二十連合航空隊司令官を歴任した。同二十年五月、海軍中将。同二十二年十月、皇族を離脱し、久邇の姓を賜り、久邇朝融と称す。昭和三十四年十二月逝去。

王はクラシック音楽に精通され、戦前は膨大なSPレコードを蒐集されて、「レコードの宮様」として知られた。またピアノやチェロを演奏され、名チェリスト・ジョセフ・ホルマン（一八五二―一九二七）遺愛のチェロ（一七四〇年、ガルネリウス製作）を所持されていた。音楽は長坂好子（一八九一―一九七〇）に師事し、宮中の音楽会でもヘンデルのラルゴを歌われた写真が残されている。また蘭や薔薇の栽培にも長じておられた。

王は書道を能くされ、『邦彦王行実』（一九三九年、久邇宮）の書名題簽と題辞「聿修其徳」の揮毫をされている。熱海尋常高等小学

校の「忠孝」の二字（昭和七年・現存せずと云う）、熊本の北岡神社の神額（昭和八年）、鹿児島指宿の杖間神社の扁額「天業恢弘」（昭和十年代中葉）、信州飯田の元善光寺の平和殿の扁額（昭和二十四年）および梵鐘「平和の鐘」銘（昭和二十五年）など、染筆の依頼が少なかつたようである。

ところで、朝融王の「朝」の字は祖父宮・朝彦親王の偏諱、「融」の字も朝彦親王の青蓮院門跡時代の法諱「尊融」の偏諱であると思われる。朝融王の号に關しては、今年、筆者が元善光寺・北岡神社を調査した際に書額に「憲堂」の印が捺されたことから、憲堂と号されていたことがわかった。なお、この「憲」の字は、朝彦親王が天保八年の親王宣下の折に賜った「成憲」の偏諱ではないかと考えられる。

二〇一〇年七月、北岡神社に参拝して神額を調査させていただいた。同社の記録によると、昭和八年（一九三三）四月に同社が鎮座一千年を迎えるにあたり、王より神額のご染筆を賜り、あわせて参列を仰ぎ、同式年大祭が斎行されたという。軍服に大勲位菊花大授章を佩用された王が、社殿前の参道を歩かれるところを撮影された写真が残されており、拝殿内に飾られていた。金箔が押された神額は、拝殿内の上方中央に掲げられていた（図5）。「北岡神社」と大書され「朝融王」と署名されて、「朝融王章」「憲堂」の二印が捺されている。高いところに掲げられているので、大きさは不明であるが、相当大きな神額と拝見した。

北岡神社の調査に先立つことひと月、同年五月末に元善光寺に参詣して調査させていただいた。皇族離脱後の王が元善光寺の奉賛会

長であったことから、同寺にある梵鐘は、王自身によって「平和の鐘」と命名されたもの。梵鐘の「平和の鐘 久邇朝融」という八字は、王の筆に拠るもの。銘文は善光寺貫主の清水谷恭順大僧正による。昭和二十五年九月に名古屋の鑄師・十一代加藤忠三朗（一九一三—一九八二）によって鑄造された。梵鐘には協賛者として当時の首相・吉田茂や幣原喜重郎、増田甲子七など当時の政治家の名が刻まれている。なお、鐘樓の内部には「金一封 元久邇宮朝融王」とある木額が掛かっていた。

同寺の平和殿に王の扁額があるとのことで、案内していただいたところ、平和殿は南アルプスが一望できる高台にあった。ここでは戦没者の霊位を祀っており、王の染筆による扁額が掲げられていた（図6）。檜材の扁額に、おおらかな書風で大書された「平和殿」の三字と「昭和二十四年春／朝融書」の署名が陰刻されて緑色の彩色が施されている。印章は冠冒印が「意心所適（意心の適ふ所）」とあり、署名の後には「朝融王章」「憲堂」の二印が刻されて朱色の



図5



図6

彩色が施されていた。皇族離脱後の王は、昭和二十四年と二十五年の二度、元善光寺に参詣されている。昭和二十四年春には元善光寺近くの今村家にお立ち寄りになり、本多善光卿が難波から持ち帰った阿弥陀如来像を置いたという伝承のある、邸内の如来腰掛石をご覧になったという。

以上、久邇宮三代の書について浅談させていただいたが、歴代、額字を下賜されることが多かったように思われる。戦前は各地の寺社が皇族方に染筆を依頼するむきが少なくなかったようであるが、当然のことながら、染筆の多い方とそうでない方がおられる。久邇宮歴代は能書であられたため依頼が多く、かつ染筆を好まれたからこそ、多くの書蹟が残されているのであろう。

参考文献

- 『青蓮歌集』（久邇宮朝彦親王三十年祭記念、一九二二年）
- 『朝彦親王景仰録』（久邇宮朝彦親王五十年祭記念会、一九四二年）
- 『邦彦王行実』（久邇宮、一九三九年）
- 『楽興の時（上）・（下）』『鼎談』、『レコード音楽』、名曲堂、一九四九年九月、十月）

本多賢胤『復興』（元善光寺、二〇〇三年）

付記

二〇一〇年五月、信州飯田の元善光寺を調査させていただいた折は、住職の本多秀賢氏に親しくご案内とご教示をいただいた。久邇朝融氏が同寺を参詣された折、接待役の今村忠助氏（当時の国会議員）らと撮影された写真も拝見させていただいた。さらには、寺宝の数々と現・青蓮院門跡名誉門主の東伏見慈洽氏（久邇宮邦彦王第三王子で朝融王の弟宮）が染筆された客殿の扁額や衝立も拝見させていただいた。そして本多秀賢氏よりご紹介いただいた今村善興氏のお宅に伺った。今村氏邸は「善光屋敷」と呼ばれているように、本多善光が住んでいたという伝承のある所である。邸内の如来腰掛石を見せていただいた。

同年七月には、熊本の北岡神社の神額を調査させていただいたが、その折には同社権禰宜の町田誠一郎氏にご案内とご教示をいただいた。

千葉の神野寺、指宿の杖間神社、熱海市立第一小学校長・神尾義敬氏には、電話にてご教示いただいた。さらに第一小学校からは創立百年の折に上梓された『樟齢 百年のあゆみ』を御恵贈いただいた。

ご協力いただいたこれらの方々に、厚くお礼申し上げます。

（二〇一〇・一〇・四 受理）